

衛生技術官の行政官としてのジレンマは、その後の厚生省の設置等において、政治が衛生技術を公衆衛生としてどのように評価してきたのかを含めて、これからの研究課題であろう。

第5章では戦後の占領下における衛生行政を記している。GHQ/SCAP/PHWは科学的・客観的・合理的な行政を指導したが、この専門性の重視(科学主義)は衛生技術官の求めてきたものに合致するものであり、戦後の衛生行政の再建は現場においては好意をもって迎えられたと考えられる。地方衛生研究所設置要綱が1948年につくられるなど、戦後の混乱期に衛生行政の重責は大きかったと考えられる。しかしこのプロジェクトは完成したとは言えずに、その後の世界の政治と日本の復興の中で次々と起こってくる、新たに必要とされる衛生科学技術に後追いの対応を余儀なくされてゆくことも述べている。

終章では本書の要約として日本の衛生行政における試験検査部門の歴史を「明治のモデル移植期」「大正からの展開期」「戦時変容期」「戦後改編期」に分けたとしている。

法と現実の間にあり、大学の学術的研究と行政の実務的研究の間にある技術者の問題提起はどの領域においても重要で意味のあることが多い。しかし衛生行政において、そのような問題提起は放置されていることも多い。本書はその現場を経験された著者がそのような構造に対して日本衛生行政史を検証することにより一石を投じたものと考ええる。読者の立場からは本書の、章立てが細分化されてテーマごとに分けられることと、技術者と技術官の問題の議論が今後深まることを期待します。

政治・社会だけでなく自然現象でも想定できないことのおこりうる現代に、衛生技術(者)はどのように対応してゆけばよいのか、歴史学のみならず未来学に携わる方にも読んでいただきたい研究書として紹介します。

(渡部 幹夫)

[晃洋書房, 〒615-0026 京都府京都市右京区西院北矢掛町7番地, TEL. 075 (312) 0788, 2011年3月, A5判, 231頁, 3,400円+税]

## 青木歳幸 編

### 『小城の医学と地域医療——病をいやす——』

本書は2011年10月15日から11月27日にわたって小城市立歴史資料館において開催された特別展の図録で、図録編、パネル編、論考編、史料編の4編からなる。図録とはいえ前2編をあわせても約4分の1を占めるにすぎず、大部分は史料編であり、そのうちでも馬郡元孝の「東征日記」が50ページ余りを占めている。その意味では特異な図録といえよう。

佐賀大学地域学歴史文化研究センターと小城市教育委員会は、2006年以降、地域に密着した特別展を開催して地域の文化発展に寄与してきた。2011年の展示会は本学会代議員でもある同センター青木歳幸教授がプロジェクト代表としてまとめ役となり、史料解説にも腕をふるっている。「は

じめに」によれば、この展示会は江戸時代の庶民医療の実態や、医師による投薬と治療の広がり、漢方医学から西洋医学への転換と近代医学の発達、地域医療の展開の姿を描くことを目的としている。

あくまでも地域に根ざした医療の在り方に主眼のおいているので、図録編には佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫所蔵の「元茂公御年譜」や「藩医松隈氏江戸出仕記事」、佐賀県立図書館寄託の「明暦二年御直印之着到」などがある一方、全国的に知名度の高い『本草綱目』や『和漢三才図会』もとりあげて「1 漢方医学の展開」をしめしている。「西洋医学の導入」ではわれわれに馴染み深い『解体新書』や各務文献の『整骨新書』とともに、高

良斎の弟子として蘭医学をまなび、神官でもあった柴田花守の画像もみられる。医師免許制度のなかった江戸時代にあつて、佐賀藩は医師の医療技術向上を目指して試験制度を導入し、これに合格すれば免札（開業免許）をあたえていたが、現今の医籍ともいえる「医業免札姓名簿」——これについてはさきに酒井シヅ順天堂大学名誉教授が『近代西洋文明との出会い』（杉本勲編 思文閣出版 1989年）において詳しく報告している——も展示されている。

「2 近代の地域医療」では「幕末から明治の医療」として戊辰戦争に従軍した馬郡元孝の「東征日記」や「新々園処方録」があり、展示された江戸時代の薬研から現代のライツ社製顕微鏡の写真が収録されている。

パネル編は「引痘方諸控」にもとづいて、安政6年から翌年にかけて松尾徳明が40ヶ所でおこなった種痘の実数をプロットした地図があり、「明治期のコレラ被害と疫病碑」や「著名医家塾への肥前出身門人」も貴重なパネルである。

つづく論考編は6ページにわたる岩松要輔の「西南戦争時における博愛社救護班の活動——看護長江原益蔵の記録より——」である。西南戦争において佐野常民が博愛社を結成して救護活動にあたったことは有名であるが、著者岩松要輔は「十分に博愛社の趣旨が理解されておらず、辛うじて任務が進められた苦労の様子が江原益蔵の日記から窺うことができる。」と「まとめ」においてのべているのは、いかにも残念との気持をかききれない様子がみえる。

史料編は7編からなり、その見出しをあげれば、1. 葉隠・医学史料、2. 引痘方控、3. 馬郡元孝「東征日記」、4. 柴田花守「開化古徴」、5. 柴田花守著 虎狼利・禊教毒予防方、6. 葉種商改廃関係書類、7. 小城郡医師一覧である。紙数の関係で詳しく取りあげるわけにはいかないので、ごく1部を簡単にふれる。

「引痘方控」は安政6年4月から翌万延元年6月までの1年3ヶ月に、佐賀藩をはじめとして近隣諸藩の40ヶ所を巡回して、およそ1,224人に牛痘接種を実施した記録である。接種人員について

はすべての場所について記載されていないので、実数はこれをはるかに上回っていたにちがいない。これらの接種には記録者の松尾徳明のほか延94名の藩医などが協力している。

「東征日記」は元治元年に家督相続をうけ、同じ年に佐賀藩好生館から医術開業免状をうけた馬郡元孝が、35歳の春に戊辰戦争に従軍した記録である。この年の閏4月3日から筆をおこし、東北各地を転戦して12月14日におわる。これについて「王政維新見随録」として佐賀の乱にいたる世相を記している。

医師としての従軍であるが、その記事は戦闘状況や人的損傷の記事がおおく、戦死や手負いの内容に立ちいった記述は68ページの6月26日条にあるのみである。そこには28名の受傷者名とその部位が記述されて、その結果にもおよんでいる。このうち戦死者数は10名であるというが、この戦死者のなかには陣中において死亡したものはふくまれていないようである。他の場所での戦闘状況もかなり詳細に記述していて、その意味では東征に参加した医師としての立場からの従軍日記といえようか。

5月15日の上野の彰義隊総攻撃には「各左ノ攻口ヨリ攻入、愉快ノ奮戦ヲ遂ケ、賊徒忽ケ敗走シ、上野山内悉ク灰燼トナリタリ」といささか<sup>(ママ)</sup>穏当を欠くかと思われるような記述をふくんで詳細をきわめているが、この時期、著者自身は宇都宮に在陣していた。さらには時刻を午前、午後という言葉で表現していたり、「江戸」に「東京ノ旧称」との割り注をくわえているなど、リアルタイムでの編述ではなく、後日になって浄書の手が加わっている可能性をうかがわせる。著者の文学的素養がおりおりにかいまみられ、自ら作賦した漢詩が随所に散りばめられていて、ときには陣中での作賦を「同行ノ兵士ニ呈ス」という、いささか傍迷惑とも思える行為をあえてする稚気も有していたようである。

「開化古徴」、「虎狼利・禊教毒予防方」は神道家でもあり、医師でもある柴田花守の著書で、とくに明治7年7月発行の『虎狼利・禊教毒予防方』はコレラと禊教（キリスト教）を同列において、

神国日本にコレラをいれてはならないと力説しているのは神道家としての面目躍如たるものがある。

この図録によって、たとえ展示品を目の当たりにする機会がなかったわたくしでも、同研究センターが佐賀学の解明や歴史文化の学術分野で地域貢献をしようとの意欲を十分にもちあわせている

ことを感ぜさせてくれる。

(深瀬 泰旦)

[佐賀大学地域学歴史文化研究センター、〒840-8502 佐賀市 本庄町1, TEL. 0952(28)8378, 2011年10月15日, A4判, 120頁]

宝月理恵 著

## 『近代日本における衛生の展開と受容』

本書は著者のお茶の水女子大学に提出された学位論文をもとにした著述である。本書のタイトルでもある「近代日本における衛生の展開と受容」は、近來の10年間で日本史においても医学史においても著しく関心がもたれたテーマであるといつてよい。日本医史学雑誌の書評においても、七木田文彦氏の『健康教育教科「保健科」成立の政策形成』や田口喜久恵氏の『近代教育黎明期における健康教育の研究』などの大著が並ぶ。この傾向は、本書を含めて医学や保健衛生と教育との関係を歴史的に問いただそうとする研究傾向が生じ、それらの研究者が医史学領域の中で仕事をし始めていることを物語るものである。

本書はその中でも最も広範な時代設定と多様な方法論が用いられている。この時代設定と方法論の特徴に視点を置いて本書を繙いてみよう。

本書の構成は、「序章 課題と方法」「第一章 近代医事衛生制度の成立と衛生思想」「第二章 学校口腔衛生の確立と歯科学の専門職化」「第三章 衛生経験の聞き取り」「第四章 新中間家族における母親の衛生戦略」「補遺 京城府の衛生経験」「第五章 身体化される／されない衛生実践」「終章 近代日本の衛生経験」からなる。

「序章」では本書の研究視点の提示が明確になされている。それは、一つはこの間の日本における衛生史もしくは社会医学史研究に広くみられる「フーコー・パースペクティブ」からの相対的離脱とそれにもとづく史実の再構成を図ろうとする視点である。M・フーコーが『性の歴史』を中心

とした著作を通じて明らかにした身体の規律化と主体化、そしてそれを手段とした生権力（生命管理政治）のあり方から個人と社会を読み解く視点に一定の意味を見いだしながらも、そこに個人を単に抑圧される存在としてのみ国家に対置する見方に限界を覚え、著者独自の視点として、「新中間層」「口腔衛生」「学校」「家庭」という舞台装置を設定し、これまでの学問的ストーリーとは異なるドラマツルギーを樹立しようとする。

第一章では近代日本の医事衛生制度の成立過程で萌生した種々の衛生思想とそれに関わる先行研究の論点をクリティカルに検討している。光栄にも評者の研究にも言及され、かつさまざまな視点からの衛生思想の分析が試みられているが、この点に関して言えば既知の学問的知見を自らの視点で再構成した感は否めない。史料レベルで衛生思想に関する新たな知見の提示は少ない。

むしろ本書の真骨頂は、第二章以降の学校口腔衛生の普及を主体とした日本国民の衛生経験の再構成の壮大な実験である。もちろんそこでは基本的な文献検索とその読解もともなっているが、有力な武器は「オーラルヒストリー」である。主に大正末年から昭和初年代に出生した男女の幼少期から青年期にかけての健康や衛生に関する経験を、口腔衛生や清潔行為、さらに健康優良児表彰（朝日新聞社主催の教育表彰事業）などの経験に関するナラティブをもとに、当時の青少年にとっての主に学校を中心とした「衛生世界」を再構成している。記述に際して学問的客観性を意識した